MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２２．１１．１０　発行元
第 415 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ディクスン・カーの代表作

久しぶりに海外ミステリに戻ってみる。海外作家の「代表作」も中途半端にしていたので、今回はディクスン・カーを取り上げてみた。もうすでに何回か触れてきたことではあるが、飛び切りの歴史的名作を…。

ミステリの歴史を作った作品

ディクスン・カーの『ベスト表』は第１８号に、『どの順番で読むか』は第１５６号に書いてある。そこで題名だけは紹介していたが、中身については未紹介になっていた。

私は大学生の時、創元推理文庫から読み始めたので、『赤後家の殺人』『曲がった蝶番』『アラビアンナイトの殺人』『爬虫類館の殺人』などが印象深かった。その後、ハヤカワのポケミス探しに入ったが、仙台では手に入れられる本には限りがあった。学生時代の終わりごろにハヤカワ・ミステリ文庫が創刊され、やっと『ユダの窓』が読めるようになったのだった。

カーという作家は好きになり始めると全作品を集めたくなるところがあるらしく、一時期は随分のめり込んだものだ。『火刑法廷』をＮｏ．１にしたことに異論が出ることは当然だと思う。フェル博士ものやＨＭ卿ものを選ぶのが妥当な線なのだ。「時代もの」が好きな私の特徴と思ってもらえればよい。

『ユダの窓』『三つの棺』は共に「密室もの」。ミステリ好きなら誰しもが読むべき名作。ライト系からミステリに入った若者にも是非読んでもらいたい作品だ。

NO.3『三つの棺』

１９３５年。有名な『密室講義』に一章を丸々使って、密室トリックの分類を行っている。世に多大な影響を与えた本。

冬のロンドン。雪が降り、辺りは銀世界に。シャルル・グリモー教授の書斎で一発の銃声が響く。来客があって、ドアの外には秘書がいた。フェル博士が駆け付けドアを開けると瀕死のグリモーが倒れており、他に人影はなかった。グリモーは謎の言葉を遺して息絶える。最近のグリモーの生活ぶりに悪い影響を与えていた奇術師フレイは、ほぼ同時刻にカリオストロ街で姿なき犯人によって射殺されていた。グリモー教授が話していた吸血鬼伝説も絡み合って物語は展開していく。密室の典型的な例として描かれた古典的名作。

NO.1『火刑法廷』

１９３７年。本格もの黄金期の締めくくりの時期に書かれた本。１７世紀に行われた「火刑法廷」とは妖術や毒殺などを行ったとされる人物を裁く法廷のことで、有罪の場合は火刑を宣告することになる。本書では、その１７世紀の女性毒殺魔の話を現代の事件に結びつけている。

舞台はアメリカ・フィラデルフィア。最初に登場してくるのは出版社に勤める編集者のエドワード・スティーヴンズ。フィラデルフィア郊外の別荘に行く途中の列車内で取り出した原稿に添付されていた１７世紀の毒殺魔の写真は妻のマリーにソックリだったのだ。原稿を書いたのは人気作家で犯罪研究家のゴーダン・クロス。そして、スティーヴンズの別荘の隣の家に住んでいたマイルズ・デスパードは少し前に亡くなっていた。邸宅の後を継いだ甥のマークの妻・ルーシーには毒殺の噂が流れていた。スティーヴンズは真相を探ろうと出入口のない納骨堂に忍び込んでみると、マイルズの死体は消え失せていた。果たして毒殺はなされたのか。亡くなる前日家政婦が見た古い衣装を着た女性の正体は。壁を通り抜けるように消えたというが…。死者の枕の下から発見された九つの結び目のある紐は何を表しているのか…。サスペンスに満ちた展開。

No.2『ユダの窓』

１９３８年。カーター・ディクスン名義で出版された。カーの代表作というと本書を選ぶ人が多いのではないだろうか。題名に示されている通りに密室ものではあるが、「法廷ミステリ」の形を取っているところが本書の特徴である。ほとんどがロンドン中央刑事裁判所審理の場面であり、章の題名にも「真実が述べられ…」「第五号の写真を見てください」などと法廷での言葉が使われている。

プロローグで事件が紹介される。ジェイムズ・アンズウェルという若者が婚約者の父親を訪ね、結婚の許しを得ようとした。部屋に通され、飲み物を口にしたとたんに意識を失い、２０分ほどして回復した時、目の前には胸に矢を打ち込まれた父親の姿を発見した。密室の中であり、たちまちに犯人と目されてしまった。次からは全て裁判の場面。ヘンリー・メリヴェール（ＨＭ）卿はジェイムズの弁護士として登場する。ここではケン・ブレークという人物が「わたし」という語り手となって推移を述べていく形になっている。法廷でのやり取りがずっと続いていく。まったく隙間のないように見えた事件を突き崩すことができるのか。ＨＭ卿は被告の無実を信じて証言を引き出していく。そして陪審員による最終章の「全員一致の評決」にたどり着く…。